

LD・ADHD・高機能自閉症等支援の必要な子どもの 「個別の指導計画」の具体的な在り方

－「機動的な個別の指導計画」とは－

学校教育においてLD・ADHD・高機能自閉症等支援の必要な子どもたちの個のニーズに応じた適切な支援が求められている。そのために一人一人に合った「個別の指導計画」の作成は必要不可欠である。そこで、作成しやすく、子どもの実態に素早く対応し、子どもの指導・支援にすぐに活かせる「機動的な個別の指導計画」の在り方を探って研究を進めてきた。

「機動的な個別の指導計画」（以下「機動的な計画」）の作成・活用に関わる実践例と、総合育成支援教育委員会（校内委員会）の運営に関わる実践例を示し、考察したことを報告する。

第1章 個別の指導計画作成の意義

第1節 LD等支援の必要な子どもの理解

学校現場でLD等支援の必要な子どもたちが示す行動や特徴は様々であることが多い。診断名にこだわらず、個のニーズを的確に把握し、適切な支援を素早く行う必要性が非常に高いと考える。

第2節 個のニーズに応えるために

個のニーズに応じた適切な教育的支援を行うためには「個別の指導計画」が必要不可欠である。しかし、個別の指導計画の作成にあたっては、先行研究から表1に示すような課題があることがわかった。

表1 個別の指導計画作成における課題

		課 題
内 容	実態把握	・的確な実態把握の難しさ
	目標設定	・目標設定の難しさ
	支 援	・支援画策の難しさ
	評 価	・評価の仕方（観点・方法）が明確でない
作成にあたって		・作成の手順・作成者が明確でない ・作成時間確保の困難さ
機能・活用		・P-D-C-Aサイクルが機能していない

以上のことから、個別の指導計画の作成に関わって大切にしたい内容を以下の4点にまとめた。

- ① 的確な実態把握をする。
- ② 明確な目標設定をする。
- ③ 個のニーズに応じた支援をする。
- ④ よりよい育みに繋がる評価をする。

また、作成にあたっては、総合育成支援教育委員会の話し合いの中で記入していけるような書式にすることで課題の解決が図れるのではないかと考えた。そして、その機能・運用については、定期的な短い期間に複数の人間で実態把握、目標設定、支援画策、評価を行うことでP-D-C-Aサイクルが機能するのではないかと考えた。

作成しやすく、子どもの実態に素早く対応し、子どもの指導・支援に生きる個別の指導計画を「機動的な個別の指導計画」と名付けた。

第2章 機動的な個別の指導計画を作成するために

第1節 機動的な個別の指導計画とは

求められる個別の指導計画を作成するために、4つの様式「実態把握観点表」「日々の様子メモ」「基礎票」「日々の取組と総合育成支援教育委員会での話し合いシート」を考案した。

1つ目の「実態把握観点表」は、的確な実態把握を行うために、子どもを見る観点を表にし、以下のことができるよう工夫したものである。

- (ア) 多面的な観点から子どもを見る。
- (イ) 子どもの得意なことに着目する。
- (ウ) 子どもの実態を見直す。
- (エ) 継続して子どもの観察をする。

2つ目の「日々の様子メモ」は、子どもに関わる教職員が、子どもの行動や反応を記録しておくものである。子どもの指導・支援を考え、確実に実態を引き継ぐために必要であると考えた。

3つ目の「基礎票」は、明確な目標設定のために以下のことができるよう工夫したものである。

- (ア) 子どもの実態と子ども・保護者・担任の願いを明らかにする。
- (イ) 目標を見直す。
- (ウ) 系統立てた指導・支援に繋げる。

4つ目の「日々の取組と総合育成支援教育委員会での話し合いシート」（以下「話し合いシート」）は、個のニーズに応じた支援をするために総合育成支援教育委員会でアイデアを出し合い、話し合いの場で記録できる書式に工夫したものである。

第2節 機動的な個別の指導計画の作成手順

まず、「実態把握観点表」の学年相当程度を基準として、子どもの力が不十分な項目にチェックを入れ、どこに課題があるのかを見つけていく。

同時に、担任やその子どもに関わる教職員が子どもについて気付いたことを「日々の様子メモ」

に記入しておき、話し合いの場等での資料にする。

そして、本人・保護者と担任が話し合い、「本人の願い」「保護者の願い」と実態を基に、「担任の願い」として1年間の目標、指導・取組の方向を「基礎票」に記入する。さらに、学年末には、1年間の評価を書き込んで申し送りの資料とする。

また、総合育成支援教育委員会の中で、今の子どもの実態を見つめ、実態と目標を見比べながら、どんな支援をしていくかについて話し合い、「話し合いシート」に記録するようにした。実践した後、次の月の総合育成支援教育委員会で、支援や目標に対する評価をし、支援や目標を再検討する。

「実態把握観点表」「基礎票」については、年3回の見直しをする。「話し合いシート」については、月に1回総合育成支援教育委員会を開き、前月の評価、今月の実態、目標の確認、支援についての再検討などの話し合いをする。

第3節 機動的な個別の指導計画を運用するために

「機動的な計画」を運用するためには、総合育成支援教育委員会が機能することが欠かせない。全校体制としてみんなで個別の指導計画を作るという意識が不可欠である。支援の必要な子どもの実態や目標を全教職員に適宜伝え、共に悩み考えることで支援への意識が高まっていくのではないだろうか。子どもの成長や変容を共に喜び合える姿勢こそが、よりよい支援体制に繋がると考える。

第3章 機動的な個別の指導計画運用の実際

第1節 書くこと・読むことに課題がある 子どもの事例 ～小3 A児～

A児について「機動的な計画」を活用した実践を行った。「実態把握観点表」を使った観察では、「読む」「書く」の項目に課題が集中していることがわかったが、項目によっては、十分にできるものがあることもわかった。また、「計算」などが得意であることがわかり、意識して生かすようにした。「話し合いシート」を使った話し合いでは、A児が自信を持てるようにするための支援や習った漢字が使えるようにするための支援などのアイデアが出され、有効な支援を行うことができた。

第2節 総合育成支援教育委員会での話し合い

総合育成支援教育委員会での話し合いを進める中で以下の4点の課題が見えてきた。

- ① 実態についての話に時間がかかる。
- ② 取り組む課題を絞ることが難しい。
- ③ 話し合いの焦点が定まらない。

④ 個別の指導計画となる記録が残せない。

そこで、以下の方法を用いて解決を試みた。

- ① 「話し合いシート」の項目に沿って要点を絞って話す。
- ② 無理に課題を絞らず長期目標を見据えた支援を挙げ、支援に込めた願いを記録する。
- ③ 話し合いの流れを
- ④ パソコンを使って、



図1 総合育成支援教育委員会の様子
これらの工夫により、話し合いが充実し、「機動的な計画」を作成することができた。

第4章 研究の成果と課題

第1節 様式・内容についての考察

「実態把握観点表」を使うことで、課題がはっきりしたり、詳細な要因が明確になったり、得意なことを生かすように心掛けたりすることができた。また、定期的の実態を見直したことで、日々の小さな成長に気付くこともできた。「基礎票」を記入する過程では、家庭と話し合う機会が増え、その後の連携へと繋がった。「話し合いシート」を作成する過程では、話し合いを行う中で、常に今の子どもの実態を見つめ直すことができた。話し合いの中で出た様々な支援のアイデアを記録しておき、有効な支援を申し送れるようにすることができた。有効に働かなかった支援については、すぐに次の支援が考えられた。

第2節 作成・運用についての考察

総合育成支援教育委員会を開き、その中で個別の指導計画を作成することは、簡単とは言えないかもしれない。しかし、全校体制の中で作成することにより、担任等誰か一人に掛かる負担は少なかったと感じている。運用については、月に1回という短いサイクルで実態や目標、支援を見直したことが、今の子どもの実態に素早く対応できるものになった。

研究を終えて

この研究を通して、個別の指導計画が生きて働くためには、いくつかのキーワードがあることが見えてきた。「子どもの今の姿を確かめながら」「常に手直しを重ねて」「いつも全校体制の中で」「次へ繋げるために」これらを盛り込んだ「機動的な計画」を引き継いでいくことが、子どもが持っている可能性を最大限に引き出す近道と考える。